



筑紫女学園大学リポジット

Effect of the Group Size in Picture Book Reading on Young Children's Interest in Picture Book

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大元, 千種, 青柳, 恵里香, OHMOTO, Chigusa, AOYAGI, Erika メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/56

絵本に対する幼児の関心に及ぼす読み聞かせの グループサイズの影響

大元 千種・青柳 恵里香

Effect of the Group Size in Picture Book Reading on Young Children's Interest in Picture Book

Chigusa OHMOTO and Erika AOYAGI

1. 研究の目的

今日、絵本の読み聞かせは家庭においても保育の現場においても日常的に行われており、子どもの発達における絵本の読み聞かせの重要性はこれまでも多く報告されている（秋田・増田, 2009; 佐々木, 2006; 徳永, 2002）。たとえば、佐藤・西山（2007）は、絵本の読み聞かせの場は、子どもたちが絵本のもつイメージの世界の豊かさおよび言葉や絵の素晴らしさを体験し、現実世界とは異なる想像世界を体験し、ふれあう場であると述べている。

近年の家庭における絵本の読み聞かせの重要性については、ブックスタート運動においても注目されている。吉田（2011）は、イギリスで始められたブックスタート運動も、わが国においては子育て支援事業の一環として、絵本の読み聞かせで親子のコミュニケーションを図ることが目的の一つとなっていると指摘している。絵本の読み聞かせをとおしてコミュニケーションをとることによって、子どもの情緒の育ちや身体的な発育を促すと同時に、育児に関わる母親の情緒の安定に対しても良い効果があると期待されている。また、田島（1994）は、2歳児に対する母親の読み聞かせの様子を観察し、絵本の読み聞かせをとおしてのコミュニケーションについて検討を加えている。幼児が絵本の内容に対して自分なりに考えたことを付加的に発言することによって母親の共感的な応答を引き出し、相互作用が活発になるという結論に至っている。すなわち読み手と聞き手とが一对一で深く関わることは、絵本に対する子どもの興味を喚起し、イメージをつくり、さらなる母親と幼児との相互作用を促しているのである。

絵本は個人あるいは少人数での読書を想定されたものである。それゆえ、絵本の読み聞かせでは、個人の内的世界に深く入り込んでいく。しかしながら、保育や教育現場では、集団を対象にした絵本の読み聞かせが日常的に行われており、集団だからこそその実践や効果もある。中澤・杉本・衣笠・入江（2005）の研究では、3人を対象とした読み聞かせが、絵本の理解度とイメージ形成に有効であるという結果が示されている。一方、岩崎（1986）の研究では、一对一では自発的発言がほとんどなかった子どもが、7人の集団での読み聞かせでは他の子どもたちに刺激されて、一緒に楽しみ、理解しようとする積極性が生まれたという報告がされている。すなわち集団での読み聞かせでは、

ありのままや感じたままを表現する場として、リラックスした心の状態であることができるという。ただし、この調査での集団の規模は7人であり、通常のクラスの20人～30人を対象とした読み聞かせとは異なる結果になる可能性もある。

友達と絵本を共通体験とすることによって、遊びや保育活動を豊かにしている実践も多い。田代(1992/2001)によれば、絵本は、幼児にとって大人に「読んでもらう」ものであり、子どもは大人が自分のために読んでくれているという「幸福感」を何よりも満喫することができる。さらに、子どもはその「幸福感」に包まれて、聴きながら絵を隅から隅まで眺めることによって登場人物の気持ちや場面の雰囲気を感じ取り、ハラハラ、ドキドキ、シミジミするなど心を動かすのである。まさにそれが絵本の読み聞かせの醍醐味といえる。そして、集団での読み聞かせであれば、その心の動きは他の子どもたちと相互作用があり、一人だけの読み聞かせではない心の動きが見られる。木戸・山口(1989)も、集団で毎日読み聞かせることによって共通の体験が生まれてくることに着目している。集団保育の場はその体験を広げていく絶好の場であり、家庭での読み聞かせと集団での読み聞かせの体験が重なり合って、最大の保育効果が期待できるとしている。また、1年間日常的に絵本の読み聞かせを行い、4歳児の変化を追った寺田(2003)も、次第に子どもが絵本の楽しさや友達との楽しい時間を共有する喜びを知り、自分をコントロールして「落ち着きのある」子どもに育っていくことができると述べている。もちろん絵本の読み聞かせが子どもを「落ち着かせる」と性急に結論づけることはできないし、読み聞かせが効果的であるためには、子どもの気を散らさないような環境整備や、子どもの注意をひきつけられる保育者の方略の工夫が必要とされる。佐藤・西山(2007)によれば、集団での読み聞かせの場では、子ども同士が相互に反応し、それが刺激となって一つの集団としての読みの反応を生む。さらに、保育者から聞いた楽しい話を皆と一緒に聞いた経験は「関係の形成」の内実であり、それが、子どものことばを豊かにしていく。すなわち言語的な共同性の基礎を作るのである。

以上のことから、集団保育での絵本の読み聞かせにおいては、子ども同士の相互作用と友達と場と時を共有する喜びがあり、そのことが絵本体験を豊かにしていると言える。すなわち、それこそが個人や少人数を対象とした絵本の読み聞かせの場合とは異なる、集団ならではの効果である。

一方、小林(1997)は、3歳児(28名)、4歳児(32名)、5歳児(30名)各1クラスでの読み聞かせにおいて、年齢、性差、座席による反応を調査している。2回同じ絵本の読み聞かせを行うことによって、内容や場面に対する熟知度が上がり、3歳児でも興味を示し、集中することができるようになってきている。性差では、1回目ではじっと絵本を見ているだけが多く見られた女兒が、2回目では友達との会話や微笑が見られている。座席では、後ろの座席のほうが集中できにくくなっていた。後ろに座ったために絵本に集中できなかったのか、絵本に興味がない子どもが後ろに座ったのかという因果関係について結論づけられてはいないが、後ろに座ることによって集中できにくくなる可能性があることが指摘されている。

そこで、本研究では、これまでの調査から、絵本の内容の理解や集中度、反応の良さを考慮し、5歳児クラスの幼児を対象として、子どもの注意や反応について集団規模、性差、座席による違いを時系列で追うこととする。それによって、集団での絵本の読み聞かせに対する子どもの反応の特

徴を明らかにする。また、絵本は子どもたちにとって新奇性が高いものを1回だけ読み聞かせすることによって、絵本に対する子どもたちの反応をより特徴づけることとする。

2. 研究の方法

(1) 調査対象

F市内の私立保育所年長クラスの男児22名、女児17名計39名（5歳3か月～6歳4か月）

(2) 調査期間

2009年8月27日～8月31日

(3) 調査場所

調査対象児のクラスではない保育室で、調査の時間帯は保育活動に使用していない。

(4) 調査で使用した絵本

ラム, K. (文)・ジョンソン, A. (絵) 石津ちひろ (訳) (2004). あらまっ! 小学館
(Lum, K., & Johnson, A. (1998). *What!.* London: Bloomsbury Publishing Plc.)

絵本の選択には以下の点を考慮した。すなわち「調査対象の保育所では読まれていない」「幼児たちにあまり知られていない」「最近発行されたもの」「イメージが広がりやすい」「5歳児が理解できる」「笑えるような楽しいストーリー」である。読み聞かせに要する時間は約5分間である。

この絵本の内容の要約は以下のとおりである。パトリックはおばあちゃんの家にお泊りにきた。夕方になりおばあちゃんから「はやく ベッドにはいって、さっさと ねなさい」と言われるが、「ほくの ベッドなんて どこにも ないよ」とパトリック。おばあちゃんは「あらまっ!!!?」と大急ぎで木を切り倒し、「ベッド」を作り上げてしまう。さらに、おばあちゃんは鶏の羽をむしって入れた「まくら」や、羊の毛を刈って毛糸から編んだ「もうふ」、カーテンを切って縫った巨大な「くまのぬいぐるみ」を次々に作り上げていく。そしてくまのぬいぐるみを作った時には朝になっていたというストーリーである。

(5) 調査の手続き

調査は、夕方の自由遊びの時間帯を利用した。読み聞かせは当該保育所の保育士ではない調査者1名が担当し、当該クラス担任等の保育士は部屋には入らない設定にした。

調査者は子ども用の椅子に座り、読み聞かせの対象者である子どもたちにその前の床に自由に座るように指示した。座る場所、座り方も自由とした。子どもたちの後方に保育室の出入口と廊下がある。

調査者は1名で、子どもは1名、3名、24名のグループサイズで構成した。子ども1名は、男女児とも3名ずつ抽出し1名ずつに読み聞かせを行った。3名グループは、男女別に3名を各2グループで構成した。24名のグループは男児14名、女児10名の混合であった。グループ分けは、担任の保育士に依頼し、子どもの特質によって偏りがないようにした。

調査は、ビデオカメラ (Victor CR-DX300K) を設置した調査室の保育室に調査対象児のみ集めて読み聞かせを行った。どのグループも同じ部屋を使い、同じ位置関係で読み聞かせを行い、読み聞かせの間の子ども様子をビデオカメラで録画した。ビデオカメラは子どもの反応が良く見える

ように調査者の後方に高さ140センチの位置に設置した。

調査者は事前にビデオカメラを持ってクラスを数度訪問し、録画はしない状態でカメラの前で絵本の読み聞かせなどを行った。それによってビデオカメラに子どもたちを慣らし、調査者との関係をつくった。

読み聞かせの状況は、人も物音も遮断した実験室での調査とは異なっていた。すなわち、調査室は保育所内の保育室であり、自由遊びの時間帯であったので、読み聞かせ中も人の声や物音が聞こえ、ガラス戸越しに廊下を行きかう人の姿も見えた。時には調査以外の子どもが部屋をのぞいたり入って来たりするなど通常の保育と同じようであった。すなわち、絵本の読み聞かせを聞いている子どもたちの集中が途切れてもおかしくない状況での調査であった。しかし、調査者はどのような状況であっても、絵本の読み聞かせを中断せず、子どもたちへの質問や声かけ、子どもの発言への受け答えなどしないで、文章どおりに読み聞かせを行った。

(6) チェックリストと分析

チェックリストは、絵本に対して関心を示した行動と関心を示さなかった行動についての項目で構成されている(表1, 表2参照)。15秒間を1インターバルとして、録画面面を見ながらインターバルごとに項目のチェックを入れた。同じインターバル内でも複数の行動が出る場合はいずれの項目にもチェックを入れた。

「興味を示した行動／正反応」(表1)のチェック項目の1～10は小林(1997)から、11～12の項目は岩崎(1986)による。13、14は本研究で付け加えたものである。「興味を示さなかった行動／負反応」(表2)のチェック項目の15～19は小林(1997)により、20、21の項目は岩崎(1986)による。チェックリストの項目以外での気づきは、自由記述で欄外に記入した。

3. 結果

(1) 人数と性別による反応の違い

全インターバルにおける1人当たりの反応を人数グループごとに算出し、表1に「興味を示した行動／正反応の割合」を、表2に「興味を示さなかった行動／負反応の割合」を示した。

表1、表2に示されるように、正反応も負反応も人数が多くなるほど活発になり、女兒よりも男児のほうがよく反応していた。全体的には絵本に関心を示した正の反応が多く(表3)、男女計で1名対象で92.08%、3名グループで94.54%と、1名と3名にはあまり差が見られない。しかし24名グループでは、78.07%と割合が低くなっている。正の反応行動をみると、子どもたちは身動きせず、絵本に集中しているわけではなく、手や足を動かしたり体を揺らしたりするなど体のどこかを動かしていたことがわかる(表1)。それは、特に3名グループで多く見られ、女兒よりも男児に多く見られた。どの場面でも部屋の外からの人の声や物音は聞こえており、廊下を行き来する人もいるが、この3名グループでは読み聞かせの最中に他の子どもが部屋のドアをあけたり中に入ってきたりしたこともあり、注意が外れ易かったとみえる。全体的には、女兒の方が男児より体を動かさないで絵本を見ている。

表1 興味を示した行動／正反応の割合

チェック項目	1名対象		3名グループ		24名グループ	
	男 (%)	女* (%)	男 (%)	女* (%)	男 (%)	女 (%)
1 視線が本に向いている/本に集中している	6.67	35.09	8.33	28.07	12.14	31.50
2 興味を示し、発言する	0.00	0.00	0.00	0.00	2.50	0.50
3 (本の近くまでいって)指をさす	0.00	0.00	0.00	0.00	0.36	1.00
4 笑い声をあげる	0.00	0.00	50.00	0.00	8.21	1.50
5 他の友達と面白かったことを言い合う	0.00	0.00	16.67	0.00	1.43	0.50
6 絵本の場面を真似する	0.00	0.00	0.00	0.00	0.36	1.00
7 集中しているが、体が動いている	63.33	50.88	91.67	89.47	82.86	75.00
8 前に乗り出す	0.00	0.00	1.67	1.75	0.36	0.00
9 微笑する	0.00	1.75	20.00	14.04	12.86	14.00
10 驚く	0.00	0.00	0.00	0.00	1.07	2.50
11 うなづく	1.67	0.00	1.67	0.00	0.00	0.00
12 絵本の言葉を復唱する	0.00	0.00	0.00	0.00	0.71	0.00
13 他の子どもにうるさいなどと注意する	0.00	0.00	0.00	0.00	1.07	1.50
14 友達と共感するしぐさをする	0.00	0.00	55.00	3.51	1.79	2.00

*19インターバル、それ以外は20インターバル

表2 興味を示さなかった行動／負反応

チェック項目	1名対象		3名グループ		24名グループ	
	男 (%)	女* (%)	男 (%)	女* (%)	男 (%)	女 (%)
15 手足をモジモジさせて、落ち着かない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.42	1.50
16 友達と関係ない話をする	0.00	0.00	0.00	0.00	5.42	11.00
17 視線は本に向いているが、内容は追っていない	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.50
18 ぼーっとしている/あくびをしている	0.00	0.00	0.00	0.00	0.42	0.50
19 全く違う方向を向いている (よそ見)	3.33	10.53	18.33	0.00	14.17	23.50
20 言葉での拒否反応を示す	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
21 その他の言語や行動による反応	0.00	0.00	1.67	1.75	3.75	1.50

*19インターバル、それ以外は20インターバル

表3 グループ人数ごとの正反応の割合

グループ人数	男児		女児		男女合計	
	実数	割合	実数	割合	実数	割合
1名	43	95.56%	50	89.29%	93	92.08%
3名	147	92.45%	78	98.73%	225	94.54%
24名	354	75.32%	262	77.29%	616	78.07%

グループ人数が増えるほど、反応の種類も多くなっている。1名を対象とした場合、男児で「視線が本に向いている/本に集中している」、「集中しているが、体が動いている」、「うなづく」であったのが、3名グループになると、それに「他の子どもと面白かったことを言い合う」、「笑い声をあげる」、「前に身を乗り出す」、「微笑する」、「友達と共感するしぐさをする」が現れる。絵本は奇想天外な内容であるが、「笑い声」は1名では見られず、3名グループの男児に多く見られた(50.00%)。「友達と共感」もやはり3名グループの男児に多く見られた(55.00%)。おばあちゃんの「あらまっ」の言葉は「ベッド」、「まくら」、「もうふ」、「ぬいぐるみ」をつくる場面によって少しずつ変わってはいるものの毎回出てくる。5歳児であれば、2、3回目あたりで次も出てくるのが予測できる

と考えられるが、24名グループの男児がわずかに（0.71%）声に出したにすぎない。

絵本に対して興味を示さない負の反応行動は、グループの人数が多くなるほど様々な行動が現われ、特に24名グループでよく見られた。負の反応行動のなかでも、比較的多く見られた行動は、「全く違う方向を向いている（よそ見）」、「その他の言語や行動による反応」である。ここでいう「その他」とは絵本の内容や絵などに絵本と関わらない言動を指す。また、24名グループの女児では、「友達と関係ない話をする」（11.00%）、「全く違う方向を向いている（よそ見）」（23.50%）が他よりも多く見られた。男児もそれぞれ5.42%、14.17%見られており、大人数での集中の難しさが現われている。以上により、人数が多くなればなる程、相互作用も活発になるが、正の反応も種類、量とも増していくことが明らかになった。

（2）時系列による反応の変化

子どもの反応の時間、場面による変化の様子を明らかにするため、チェックリストの項目ごとの出現率を時系列で示した（図1～図12）。

1名対象および3名グループの場合と、24名グループの場合とは、読み聞かせの最初の時点から反応が違っていった。1名および3名では、最初から絵本に集中していたが、24名の場合は男女ともよそ見が多く、4～7インターバル（60秒～105秒）で負反応が少なくなり絵本に関心を向けていくことがわかる。さらに、他からの刺激があると集中も途切れやすく、集中している子どもたちと集中がきれやすい子どもたちが混在しているのが大人数ならではの読み聞かせ場面の状況であ

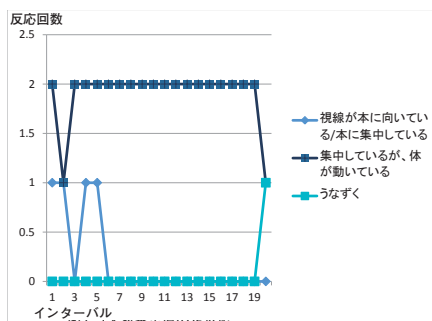


図1 1名対象男児の正反応

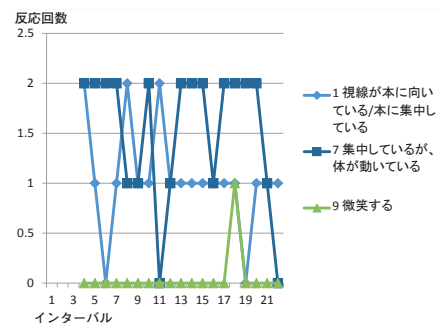


図3 1名対象女児の正反応

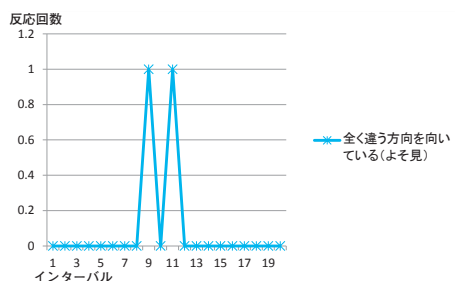


図2 1名対象男児の負反応

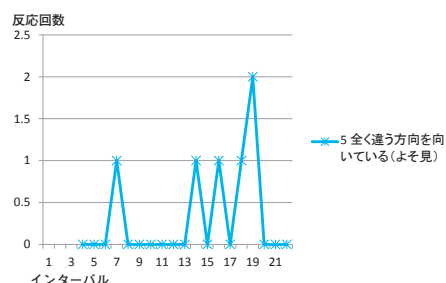


図4 1名対象女児の負反応

る。

1) 1名対象の読み聞かせの場合

男児（図1）、女児（図3）ともに最初から読み聞かせに集中していたが、どちらも体を動かしながら聞いている。途中で男児（図2）、女児（図4）とも、よそ見をしているが、後半また絵本のほうに関心を向けている。女児は男児に比べると体を動かさずに集中して聞いている場面が見られた。録画映像によれば、男児、女児ともに表情があまり変わらず、立てた膝を抱えたり、足指を持っていたり体を小さくして聞いている。絵本から目を動かさず、廊下の音や声に反応する場合も、す早く振り向いてまたすぐに絵本のほうに向きなおすなど集中していた。なかには大きな声が廊下から聞こえても、振り向きもせず集中して聞いていた男児もいた。

2) 3名グループの読み聞かせの場合

3名グループになると、男児（図5）、女児（図7）ともに正の反応が多く、かつ多様な反応になっているが、男児の方が女児より多様である。男児の場合、頻繁に笑っており、友達と絵本の面白さを言い合い、友達と共感するしぐさなど、友達がいるからできる行動が出ている。女児の場合は、友達との共感のしぐさは見られるが、男児のような多様な反応は出ていない。

録画映像によれば、男児3人とも読み聞かせが始まる前から笑い合い、わくわくしたような表情をして、読み聞かせを待ち望んでいる様子が窺えた。絵本の表紙を読んだところで早くも3人とも笑い転がっている。読み聞かせが始まって足を立てたり、伸ばしたり、横に向いたり、ころげたり、笑っただけぞったりしながら非常にリラックスして聞いていた。他児が部屋に入ってきて、ちら

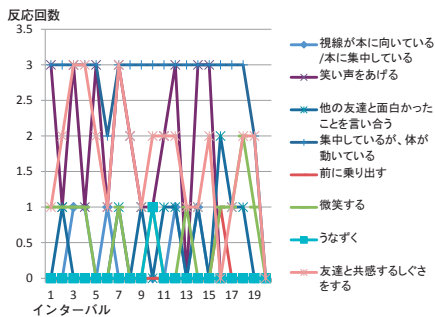


図5 3名グループ男児の正反応

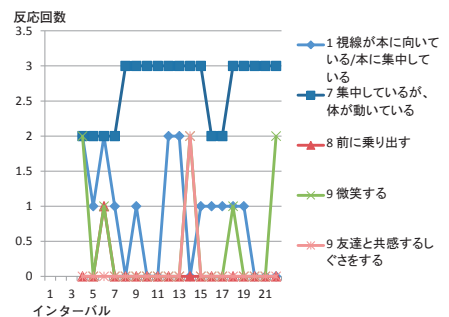


図7 3名グループ女児の正反応

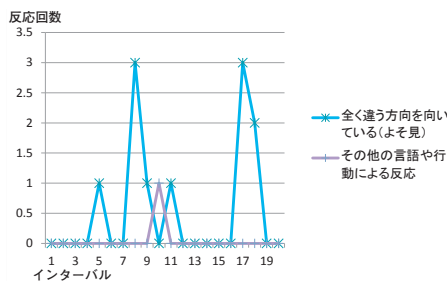


図6 3名グループ男児の負反応

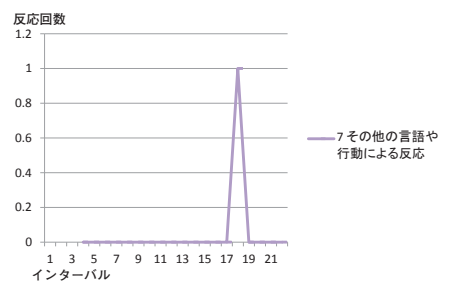


図8 3名グループ女児の負反応

りと見るくらいで彼らに関心すらもたないくらいであった。

それに対して、女兒は読み聞かせが始まる前には笑顔が見られるなど絵本を楽しみにしている様子であったが、始まると目は絵本に向けられ、あまり表情も変わらないでいた。姿勢は3人とも足を立てていたが、1名対象の場合と違い、足を広げて座るなど多少リラックスした様子であった。友達を意識していないわけではなく、始まる前に3人の女兒が一度座ってから、さらにくっついて座りなおす姿も見られた。読み聞かせ中は友達と共感するしぐさも見られている。行動としては男児のように大げさではないが、女兒も絵本の読み聞かせを友達と楽しんでいることがわかる。

3) 24名グループの読み聞かせの場合

男児(図9)、女兒(図11)ともに読み聞かせに対し正の反応が他のグループよりも多様に出ているが、その一方で負の反応も男児(図10)、女兒(図12)とも多様であり、男児のほうが活発であった。両者とも笑い声をあげ、友達と面白いことを言い合い、他の子どもにうるさいという注意や、友達と共感するしぐさをするなど友達がいるからおこる行動が出ている。

録画映像によれば、子どもたちには始まる前から楽しみにしている様子が見られ、座ってからも友だちとおしゃべりしたりふざけあったりしていた。絵本の読み聞かせが始まっても、一斉に絵本

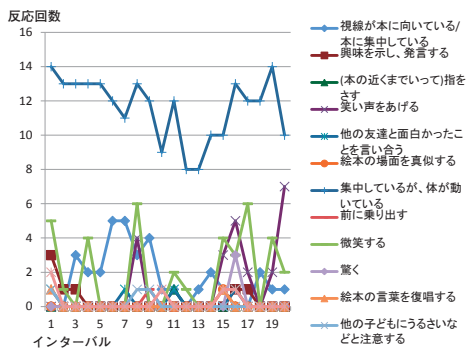


図9 24名グループ男児の正反応

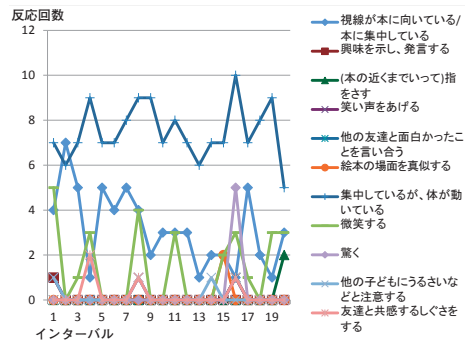


図11 24名グループ女兒の正反応

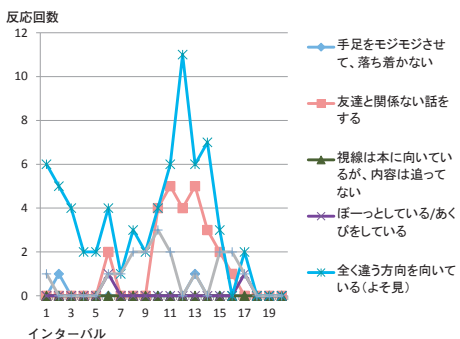


図10 24名グループ男児の負反応

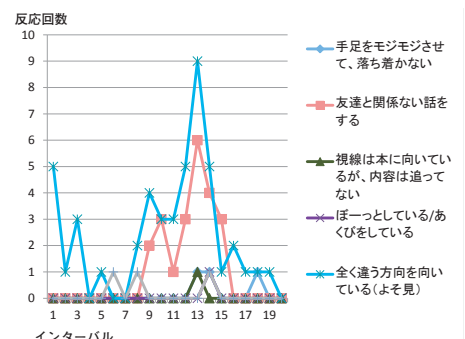


図12 24名グループ女兒の負反応

にくぎ付けになることはなく、絵本に集中している子どもたちがいる一方でよそ見や友だちと絵本に関係のない話をしている子どもたちがいる。一人が音や人、物に反応すると他の子どもたちも誘われるように次々よそ見をしていくが、その一方でまったく周囲に動じない子どももいる。また、読み聞かせ中は、ふざけ合う子どもや笑い声をあげる子ども、友達と面白いことを言い合う子どもなど騒がしく落ち着かないが、最後はみんな絵本のほうに目をむけ、満足した表情であった。

4) 24名グループでの座る位置による違い

1名対象の場合は、読み手と向かい合う形で子どもが座り、3名グループでは、読み手の前に子どもたちが横一列で座った。24名グループでは、自由に座るよう指示をすると、図13に示すようにおおまかに4列に座った。最前列に女児4人、男児1人、2列目に女児3人、男児2人というよう

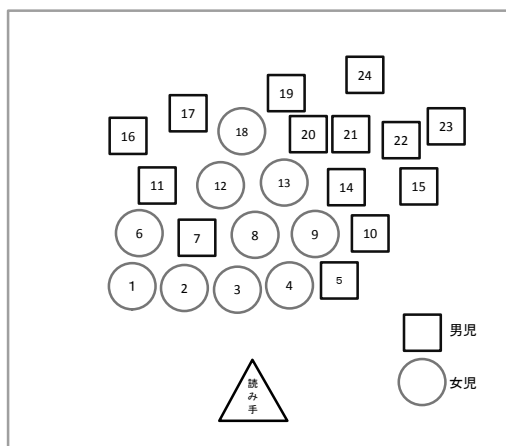


図13 24名グループの座り位置

に前方は女児が多く座り、後方には男児が座っていた。最後尾は列から離れて男児が1人座っていた。

全体的によく絵本に目をむけた正の反応も多いが、絵本から注意がそれた負の反応もよく見られた。24番、20番、17番、16番という後列の男児に負の反応が多い一方で、23番、22番の男児、18番女児、は比較的負の反応が少なく、よく集中していた。さらにその前の列の11番男児、12番と13番の女児とその前の列、すなわち前から2列目の7番男児、8番女児はよくよそ見をし、絵本と関係のない話をしている。最前列の子どもたちはと

きどきよそ見をしながらもよく絵本に目をむけていた。特に5番男児は隣が女児であったためかちょっかいを出されることもなく絵本に集中していることが多かった。

絵本によく集中していたのは、最前列の5人のほか、前から3列目の14番、15番、22番、23番という列の端に座っていた男児たちであった。18番女児は周囲が騒いでいても、隣で17番男児が、途中ずっと頭を振り続けていても、影響されず絵本に集中していた。

4. 考察

今回の調査は、対象児の人数が少なかったため、結果を一般化することは難しい。しかし、統制場面における調査ではなかったために集団保育場面における絵本の読み聞かせに対する幼児の関心に、グループサイズが及ぼす影響についての一端を取り出すことはできた。

絵本の読み聞かせに対して、全体としては絵本に関心をもち集中して聞いていたが、グループサイズによって子どもたちが異なった反応をすることが明らかになった。子どもが集中しているとき、身じろぎもせず、物音にも動じないで食い入るように絵本を見つめ、その世界に入っていくかといえば、そうではなかった。もちろん個人差はあるが、子どもたちは、目は絵本を見つめながら

も足や手や口元をごそそとよく動かし、顔や体を搔くなど、じっとしていなかった。

今回使用された絵本はどの子どもにとっても初めて読んでもらった絵本であるので、ストーリーも絵も初めて知ることになる。そのためか、1名対象の場合、体を小さく固めて、表情も変わらないくらい緊張した面持ちでまじめに聞いていた。絵本の展開についていくのに一生懸命に聞くあまりに、笑い声も発言もなかったのであろう。一人で心の中で対話するしかなく、絵本に集中してはいたが、面白がっている状態には見えなかった。

3名グループでは、非常に活発な反応が現れ発言や笑い声も出ていた。3人を対象とした読み聞かせが、絵本の理解度とイメージ形成に有効であるというが(中澤他, 2005)、子ども同士がよく関わり合って聞くことができると考えられる。1名対象では初めての絵本に緊張した面持ちであったのに対し、3名グループでは男児は最初からリラックスした様子で、「面白そうな絵本を楽しんでやろう」という意欲が見られた。女児では、やや緊張はしていたが、友達とくっつきあって読み聞かせを聞くなど、3人であることの心強さを感じ、一体感をつくっているようであった。1名対象と同じようにひざを立て、立てた足を手で持ってはいるが足は広げており、リラックスして聞けるスタイルを友達とつくっていた。その安心感があって、一緒に絵本を楽しむことができているようである。絵本そのものの面白さもあるが、友達と一緒に読んでもらったことや笑い合ったことなどがすべて絵本の読み聞かせの楽しい体験になっていると言える。

24名グループでは、子どもたちはみな最初から絵本の読み聞かせを楽しみにしている様子であったが、24人の大人数の集団の活気が感じられた。一人の子どもの絵本とは関係ない物や音に気を向けると、次々にそれが周囲に伝わっていき、いつもどこかで誰かが動いたり話したりと落ち着かない雰囲気ではあった。しかし、子どもによっては周囲に動じないで、絵本から目を離さないでいる子どももあり、特に前列と読み手から見て右後方の脇の子どもたちがよく絵本に集中できていた。

今回の調査では座っている位置で集中力が削がれるかどうかは明らかにできなかった。個人差や絵本の読み聞かせ経験の違いなどによる集中力の違いもあるであろう。もともと絵本に関心が高い子どもたちが前のほうに陣取り、友達の頭で絵本が隠れにくい位置である脇側にも絵本に関心の高い子どもが座っていた可能性もある。大人数になればなるほど、正の反応も多い割に負の反応も多く出る。子どもたちはたとえ途中で集中が途切れてよそ見やおしゃべりをしていたとしても、また再び絵本の世界に戻ってき、最後は満足した顔を見せていた。絵本だけでなく友達との共通の時と場を楽しむことができるというのも、集団ならではの絵本の読み聞かせの醍醐味である。しかしながら、単純に大人数で読み聞かせすると良いとは言えないところもある。大人数になるとどうしても集中力がとぎれやすくなるため、それを十分配慮した読み聞かせがなされなければならない。グループサイズの種類を増やして調査し、特に目立った反応を各インターバル1件のみチェックした青柳(2009)の研究においても15名を超えた集団での読み聞かせでは子どもの集中力が途切れやすく、負反応の割合が増えるという結果になっている。

子どもの絵本に対する集中が途中切れても再び絵本の世界に戻れるには、読み手がどういう事態であっても絵本を文章どおりに読むことに徹していたことも影響する。子どもの注意がそれた時、そのことを保育者が拾い上げて、返したり、みんなで考えたりすると、子どもの関心は絵本とは直

接関わない方向に発展してしまう可能性もある。それを軌道修正しようとしても子どもが読み聞かせによってイメージをつくり、絵本の世界に入っていくという絵本体験は分断されてしまう。絵本の種類によっては、読み手と子どもたちとがやりとりをして絵本を楽しむというものもあるが、子どもが心を動かすような物語絵本の読み聞かせの場合、子どもとのやりとりをしない方がより効果的な場合が多い。ただし、それも子どもの年齢や絵本体験の違い、さらには読み聞かせが何回めであるかによっても異なる。

今回読み聞かせで用いた絵本は、子どもにとって初めてのもので新奇性は高かったが、毎日読んだ絵本であれば、子どもたちは違った反応をしていたであろう。24名のグループでは、子どもたちがてんでに反応し、およそ静かに絵本の世界に入っていくというものではなかった。しかし、田代(1994)は、初回で疑問や思いつき、発見を発言していた子どもも、何回も同じ絵本を読んでもらうことで次第に黙って絵本を楽しむようになってしまうことも指摘している。疑問や思いつきなどを口に出すのは、絵本を読んでもらって心が動かされているからであり、集団でイメージを共有し、共通の絵本体験をする上で、重要な行動である。一人読みでは得られない集団の絵本の読みとり方、感じ方、楽しみ方ができると言える。子どもたちと絵本の読み聞かせ中にやりとりをした場合は、今回の結果とは異なった反応が出てくるであろう。

絵本の楽しみ方は決まり切った形や法則があるのではなく、読み手と聞く子どもたちとの間で生み出されていくものである。子どもたちが心を動かし、面白かったと満足できる集団の場合ならでは絵本の選定と読み方、楽しみ方を探していく必要がある。

参考文献

- 青柳恵里香(2009). 集団での絵本の読み聞かせの特性と方法 筑紫女学園大学文学部発達臨床心理学科卒業研究
- 秋田喜代美・増田時枝(2009). 絵本で子育て 子どもの育ちを見つめる心理学 岩崎書店
- 岩崎真理子(1986). 絵本の集団読み聞かせにおける効果(その1) 日本保育学会大会研究論文集, 39, 280-281.
- 木戸由子・山口茂嘉(1989). 絵本の読み聞かせに於ける各年齢間の反応とその行動分析について 日本保育学会大会研究論文集, 42, 150-151.
- 小林 真(1997). 集団場面における絵本の読み聞かせと幼児の反応—年齢・性差と座席の位置による影響について— 児童文化研究所所報, 19, 1-13.
- 中澤 潤・杉本直子・衣笠恵子・入江綾子(2005). 絵本の読み聞かせのグループサイズが幼児の物語理解・イメージ形成に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要, 53, 203-210.
- 佐々木宏子(2006). 絵本は赤ちゃんから 母子の読み合いがひらく世界 新曜社
- 佐藤公治・西山希(2007). 絵本の読み聞かせにおける楽しさの共有過程の微視発生的分析 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 100, 29-49.
- 田川浩三(2004). ごっこ・劇遊び・劇づくりの楽しさ かもがわ出版
- 田島啓子(1994). 絵本読みをめぐる母と子のやりとりについての分析 日本保育学会大会研究論文集, 47, 144-145.
- 田代康子(1992). 絵本の読み方・選び方—絵本を楽しむ子どもの心理を追って— 現代と保育, 30, 52-

64.

田代康子（2001）. もっかい読んで！：絵本をおもしろがる子どもの心理 ひとなる書房

寺田清美・武藤隆（2000）. 2歳児の絵本の読み聞かせ場面における保育者の思考と行動 日本保育学会大会研究論文集53, 304-305.

寺田清美（2003）. 絵本の読み聞かせ場面における子どもの変化 日本保育学会大会研究論文集, 56, 228-229.

徳永満理（2002）. 絵本で育つ子どものことば アリス館

吉田佐治子（2011）. 絵本を介した親子のコミュニケーションの発達 摂南大学教育学研究, 7, 11-22.

追記：本研究は、青柳（2009）の卒業研究のために調査したビデオ録画場面のうち、『あらまっ』を読み聞かせたグループのみを対象に改めてデータ分析したものである。

謝辞：本調査に快くご協力頂いた保育所の先生方、子どもたちに心より御礼申し上げます。

（おおもと ちぐさ：人間形成専攻 教授・あおやぎ えりか：みどり保育園 保育士）